

第5回光市立学校の将来の在り方検討会議 会議録

1 開催日時

平成29年8月23日（水）午後6時00分～午後7時30分

2 開催場所

光市教育委員会1階ホール

3 出席者

(1) 委員

山口大学教育学部	教授	霜川	正幸
光市社会福祉協議会	会長	西川	公博
光市コミュニティ連絡協議会	会長	宮尾	智義
光市母子寡婦福祉連合会	会長	中村	恵美子
光市肢体不自由児（者）父母の会	会長	中原	健次
光市小中学校PTA連合会		小川	智志
光市小中学校PTA連合会		橋本	正美
幼稚園保護者		堤	由紀子
保育園保護者		松本	奈津美
東光保育園	園長	渡邊	正善
公募委員		梅山	健史
室積小学校学校運営協議会	委員	徳原	成次
浅江小学校学校運営協議会	委員	上原	廣見
光井小学校学校運営協議会	委員	野村	香子
島田中学校学校運営協議会	委員	栗本	雅文
大和中学校学校運営協議会	委員	廣政	晴美
光市立小学校校長会	会長	酒井	宏高
光市立中学校校長会	会長	伊藤	幸子

(2) 事務局

能美教育長、蔵下教育部長、和田学校教育課長、奥屋学校教育課主幹、永光学校教育課教育企画担当、太田学校教育課長、川村学校教育課管理係長、村上光市教育開発研究所主任研究員

4 次 第

(1) 開 会

(2) 会長あいさつ

(3) 議 事

ア 「(仮称) 光市立学校の将来の在り方に係る基本構想」(案)について

(ア) 基本構想(案)の説明

(イ) 意見交換

イ 第6回会議の日程及び第6回会議以降の進め方

(4) その他

(5) 閉 会

5 議事録(要旨)

(1) 開 会

(2) 会長あいさつ

先日8月10日に、山口大学でこれからの学校づくりフォーラムを開催した。フォーラムの中で、小中連携や小中一貫が大切という話になった。子どもたちの「学び」や「育ち」を長いスパンで継続的、多角的に見ていかなければいけない。そう考えると、これからの学校のスタイルは小中連携、小中一貫がベースになるという話となった。これからの小中連携や小中一貫を進める際、重要な点が三つある。1番目は、つながったシステムをきちんとつくろうということ。2番目は、カリキュラムをつくっていこうということ。3番目は、子どもたちの「学び」や「育ち」を支えていける環境整備をしようということである。前回の会議においても、この三つのポイントを的確に押さえていただいたと思う。

本日の会議でも積極的な意見等を出していただきたいと思う。

(3) 議 事

【会 長】

本日の議事は、(1)「(仮称) 光市立学校の将来の在り方に係る基本構想」(案)について、ア基本構想(案)の説明、イ意見交換、(2)第6回会議の日程及び第6回会議以降の進め方についてである。

事務局からの説明を受けた後、いろいろな意見をいただききたいが、まず前回会議のポイントを自分なりにまとめたので、それを聞いていただきたい。

ポイントは大きく四つあり、一つ目は、教育的価値、地域づくりの意義からこれからの学校の在り方の必然性と可能性をきちんと見せていくということであった。光市教育大綱の中でどのような人を光市の中で育てていくかなど、目指す子ども像、目指す学校像について。また、地域愛を育ていける教育など、その延長線上に小中連携、小中一貫があるのだろうと思う。二つ目は、構想案自体の説得力を上げるということであった。そもそもどれくらいのスパンで構想案を考えているのか、根拠は何か、構想案の具

体的なメリットは何かを見せていく必要があるということと思う。三つ目は、地域の事情や経緯、現代的な教育課題への配慮を踏まえて総括的に描いてもらいたいという意見があった。例えば、通学路について、小中一貫になった場合の通学距離、特別支援教育などであると思う。四つ目は、ソフト面を支えるハード面を疎かにしない姿勢を出すということであった。地域コミュニティの核としての学校を描くというところで、地域の方々が集い共に子どもたちを守り育てることのできる学校を整備していくことなどであると思う。

事務局には、このポイントについて意識しながら説明していただければと思う

【事務局】

事務局から資料に沿って第1章から第3章まで説明

【会長】

第1章から第3章で何か意見があればお願いしたい。

まず、第1章の光市立学校の現状から進めたいと思う。

【委員】

13ページ、ウの対応の部分については、具体的な対応を記載した方が良いと思う。

【委員】

同様のページでユニバーサルデザイン化など、今現在において整備のされているところ、されていないところを記載するとよいのではないか。

【委員】

同じく同様のページで「障害があることにより～」という部分で、相談室の整備等について書かれてあるが、保護者が学校と相談できる場所、あるいは連携のできる環境があればよいと思う。

【会長】

その意見については、第4章の学校教育の在り方を示す制度的な方面から触れていくこともよいのではないかと思う。

【事務局】

表現や記載方法については、ご意見を参考に検討したい。

【会長】

第2章についての質問をお願いしたい。

【委員】

二つ意見があるが、一つはこの基本構想は、在り方検討会議が意見を出し作成していくものではなく、教育委員会の案に対し検討会議でさまざまな意見を出し合って作成するものなのかどうか、作成のスタンス、考え方を教えてほしい。

二つ目の意見であるが、子どもたちの姿というところは大変よいと思う。できれば、連携・協働を重視した学校づくりを開始し、どのような効果があったのかなどについて

継続的なデータを示してほしいと思う。それがなければ、小中連携から小中一貫へシフトする根拠がやはり薄いのではないかと思う。

【会 長】

スタンスについては、自分は教育委員会が案を示し、検討会議でそれに対して意見を出し合い基本構想を策定していくものであると思っているが、事務局としてはどう考えているか。

【事務局】

本基本構想は、教育委員会が案を示し、検討会議でいろいろなご意見、ご提言をいただき、修正を繰り返しながら教育委員会が作成していくものである。

【委 員】

全体的には前回の意見をよく取り込んでいる。第2章は、今までの光市の取組みを説明する非常に重要な部分で、もう少し詳しく書くとよい。施設のことだけでなく、教員定数や光っ子サポーター、スクールライフ支援員のことも入れ込むというのが教育ニーズに応えるものとして、現状を理解することができると思う。特に学校・家庭・地域の連携、いわゆるコミュニティ・スクールの中身や連携・協働ということの中で、最後の連携・協働を重視した学校づくりについて、文章だけではわかりにくいいため、図で示すと大変わかりやすいと思う。また、子どもたちがどのように変わってきたのかという説明も必要ではないかと思う。

【会 長】

他の意見、第3章についての意見はないか。

特になければ、第4章、第5章をまとめて説明いただき、その後意見をいただきたい。

【事務局】

事務局より資料に沿って第4から第5章まで説明

【会 長】

第4章から第5章までの質問等をいただきたい。

【委 員】

22ページの「わかる授業」のところがよくわからない。また、次世代コミュニティ・スクールとは光市独自のものか。

【委 員】

学校運営協議会についてであるが、合同ということが示されているが、法律的に開催できるのか。

【事務局】

22ページの表現については検討したい。

次世代型コミュニティ・スクールについては、本市独自のものである。光市教育開発研究所の調査研究から出てきた用語であり、中学校区において一体的にコミュニティ・

スクールを進めるものとして、この言葉を使っている。

合同学校運営協議会について、法律的には可能であるが、現時点では今からすぐ取り組むことまでは考えていない。

【会 長】

学校運営協議会については、法律的にそのような動きが可能となったということである。

【委 員】

次世代型コミュニティ・スクールは、将来的には幼保・小・中・高等学校をつなげたものという解釈をしたらよいのではないか。

【委 員】

第4章の3番がよくわからない。第1章、第2章で子どもが減少していくことを書き、適正規模・適正配置の観点から何かの取組みがあるのかと思ったが、特に明記していないので、どういう形にしたいのかがぼやけているように感じる。

【委 員】

今の意見と関連するが、3番の取組みは、4番につながっていくと感じた。適正規模・適正配置の視点から、小中一貫教育をすることによって小・中学校が一つになった集団での教育を行う。それが適正規模・適正配置の課題を解消することにつながっていくものと思う。また、内容的に重なっているところがあるのではないかとも思う。次に「光っ子」のすがたの三つの項目を詳しく丁寧に解説してもらいたい。例えば、人とつながりながら社会を生き抜く人、人と関わりながら社会の一員としての自覚を高めたくましく生きる人をつくりたいと、だから連携・協働を基盤とした学校づくりが必要というようにつなげてほしい。そのようにしないと結び付かないような気がしている。だから、項目1からすぐに項目4に飛んで項目3の中身は項目4に落とし込んで、その次に項目2をもってくるようにすればつながってくると思う。

【委 員】

23ページだが、「光市民学」とあるが、このような学問があるのか。

【事務局】

「光市民学」は教育開発研究所において、小・中学校の教育活動で使える教材を作成中のものである。

【会 長】

文化や歴史等を掘り下げ、地域について考えようというものであると思っている。

【事務局】

新たな学問や教科ではなく、光市のさまざまな自然や歴史などを教材として使用することを調査研究しているものである。

【会 長】

言われているような表現にした方が良いと思う。

先程の次世代型コミュニティ・スクールにしても言葉に注釈がいるかと思われる。

その他の意見がないようなので5章に進むが、今までの流れを含め、小中連携から小中一貫へという方向で、最終的にはこのような学校が子どもの「学び」や地域コミュニティなどの視点からの目指すべき学校像であるという部分について、何か意見はあるか。

【委員】

言葉の使い方が統一していないところがあるので、統一をした方がよいと思われる。また28ページのインクルーシブ教育だが、初めて聞いた言葉であり、使い方も適切でないと思うのだが、どうしても使うのであれば注釈が必要ではないか。

【委員】

28ページの小中一貫教育の柱だが、ここはもう少し丁寧に書いていくべきと思う。(2)については、教科指導だけではないので、「教科指導等をとおして」と表現するほうがよいと思う。また、先ほどのインクルーシブについては、やはり注釈が必要と思われる。(4)については、「イングリッシュプラン光の実践をとおして、子どもたちが英語を積極的に使おうとする態度や英語を用いたコミュニケーション能力の育成を図る」と書いてあるが、光市が目指す人とのつながりを前面に出すのであれば、この中に「人とのつながりを大切にしながら」や「楽しみながら」などの表現を入れるべきと思う。また(5)については、「光市民学をとおして」とあるが、「ふるさと光を愛する気持ちの育成、醸成」ということを入れないといけないと思う。いずれにしても、この中身が非常に重要なのでもっと字数を増やして、しっかりと説明するところと思う。

【委員】

第4章はこれから光市が目指す方向性、そして第5章は目指す学校であり、学校そのものを描いた章なので、小中一貫へ移行することだけを書くのではなく、もう少し魅力的な学校を描きたい。小中一貫を基本としながらも地域、防災、自然、環境、福祉等の視点から、魅力的な学校像をここで描いた方がよいと思う。そうでなくては、見る人を引き付けられないのではないか。

【委員】

今の話に関連するが、5章の構成に違和感がある。まず全体像がしっかりしたうえで、目指す方法論へという形がよいと思われる。

【会長】

第5章の描き方について、どういう形で小中連携、小中一貫へもっていくか。そこをもう少しボリュームを上げ、わかりやすくした方がよいという意見であったと思う。

事務局は、第1章から第5章までをとおして出た意見を、構想案に反映させ、次には最終的なものを提示いただきたい。

意見を言い足りない委員は、FAX等で意見を送り、事務局はそれも踏まえて構想案を修正し、次の会議はそれについて意見を出していくことにしたいが、事務局としては

どうか。

(4) その他

【事務局】

今日いただいた貴重な意見は構想案に反映していきたいと思う。また、FAXやメールでも意見を送っていただきたい。次回は、そうしたご意見を踏まえ構想案を全体的により高度なものに仕上げてお示ししたいと考えている。

【会 長】

最後に、今後の会議の日程と進め方について事務局にお願いしたい。

【事務局】

今日のご意見等をふまえ、次回示すものにさらにご意見をいただいたうえで、基本構想を策定していきたい。次回は10月20日（金）18時からとしたい。

(5) 閉会（19：30）